様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　７ 年　 ６ 月 １１ 日現在

機関番号：３３３０２
研究種目：若手研究
研究期間：2021～2024
課題番号：２１Ｋ１２８１８

研究課題名（和文）ベルクソンの記憶の行為論の研究：哲学と科学の協働による記憶研究の基盤構築

研究課題名（英文）Bergson's Theory of Memory as Action: A Foundation for Memory Research through Collaboration between Philosophy and Science

研究代表者
原　健一（HARA, Ken-ichi）

金沢工業大学・基礎教育部・講師

研究者番号：９０８８２４９９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,900,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究の主な成果は、想起の過程に関するベルクソンに独自の考えを明らかにしたことである。具体的には、ベルクソンにとっての想起には、記憶の時間的な広がりを制御するという心的な活動が伴うことを示した。また、このような想起に独自の心的な活動を示す際にベルクソンが連合主義を批判した議論を再構成した。これによって、記憶と知覚の識別過程に関するベルクソンの説明において、時間的な広がりを制御するという上述の活動が重要な役割を果たしていることを示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究成果の意義は、ベルクソンの記憶論の中に、現代の記憶の哲学と比較可能な論点を見出したことである。「想起において何が制御されているのか（あるいはされていないのか）」という論点は記憶の特性を考える上で現代の記憶の哲学においても注目されている。また、このことは、現代の記憶の哲学が心理学や認知科学、神経科学との協働を見据えた研究を進めていることを踏まえると、現代科学の観点から評価し直すことが可能な論点の一つをベルクソンの記憶論の中から見出したということも示唆している。

研究成果の概要（英文）：　The main achievement of this research project is its clarification of Bergson’s original view of the process of recollection. Specifically, it shows that, for Bergson, recollection involves a mental activity through which the temporal extension of memory is controlled. This research also reconstructed Bergson’s critique of Associationism, which he developed in order to highlight the nature of this recollective activity. This reconstruction also demonstrated that the control of temporal extension plays a crucial role in Bergson’s account of how memory can be distinguished from perception.

研究分野：哲学

キーワード：ベルクソン　記憶の哲学

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

(1) これまでの記憶の哲学的・科学的研究は、記憶の表象主義の考え方に支配されてきた。しかし記憶は、表象主義が述べるような、頭の中にあるイメージを表象するはたらきに過ぎないのだろうか。ベルクソンは、こうした記憶の表象主義の考え方を徹底的に批判した。そして、物事を探索するダイナミックな行為として記憶をとらえ直そうとした。本研究は、このベルクソンの記憶論の解明を通して、記憶の表象主義の問題点を具体化し、現代の記憶の哲学に記憶の行為論というオルタナティブを提示する。

(2) また、単にベルクソン哲学の解釈をするだけではなく、彼の記憶論における、実証的研究の知見と照合できる点を中心に解明していく。最近、哲学と科学の協働を手段の一つとした「記憶の哲学」が独立した哲学的分野として形を現わしてきた。本研究は、ベルクソンの記憶の行為論を解明することで、哲学と科学の協働による記憶研究を推進する共通の枠組みを形成することを目指す。

２．研究の目的

(1) 記憶の研究においては、記憶の表象主義が暗黙のうちに前提されており、そのことが記憶研究におけるさまざまな困難を引き起こしてきたのではないか。このような疑念は、最新の記憶の研究において少しずつ浸透しつつある。しかし、表象主義のどのような点に問題があるのかということにかんする共通見解があるわけではなく、表象主義的な諸理論に対する代替え案もまだはっきりとした形を与えられていないというのが現状である。そこで、ベルクソンによる記憶の表象主義批判を解明して、表象主義のオルタナティブとしてベルクソンによる記憶の行為論の有効性を示すことを本研究は目指す。

(2) また、その際に、科学的成果との整合性という点に気を配る。哲学史において記憶論は重要なトピックであり続けてきた。しかし、現代の記憶研究においては、哲学のみならず科学的な成果も記憶研究に多大な貢献をなしてきた。特に f-MRI などの技術革新に支えられる形で、神経科学といった分野は記憶研究の中心を担っている。したがって、ベルクソンの著作をただ解釈するだけではなく、ベルクソンの記憶論を科学的・実証的な手法によって評価できるリサーチプランを提案することも本研究の目的となる。

３．研究の方法

(1) 現代の記憶理論がもつ記憶の表象主義的傾向に対するオルタナティブとして、ベルクソンの記憶の行為論の有効性・妥当性を評価する。まずは、記憶をめぐる問題でも哲学的見解、科学的見解が比較的多く提出されている「記憶と想像を私たちがどう区別しているのか」という問題（D. Perrin & K. Michaelian, “ Memory as mental travel ” 2017）においてベルクソンの記憶論を評価する。ベルクソンは、私たちが何かを思い出す際の身体的な姿勢の差異に着目する形で記憶と想像の経験を分類しようと試みていたと予測される。ここからベルクソンが、記憶や想像の内容ではなく、それらの経験を生み出す行為の過程に着目して、記憶と想像を分類しようとしていたということが理解される。

(2) 次に「記憶と知覚を私たちがどのように区別しているのか」という問題における、ベルクソンの記憶論の有効性を評価する。特にこの問題においては、表象主義との比較を重点的に行なう。表象主義は、知覚と記憶の双方を、中立的なイメージを頭の中で表象する活動ととらえる。例えば D. ヒュームや H. テーヌといった哲学者がこの表象主義に似た見解を提示している。それに対してベルクソンは、知覚と記憶を世界を探索する行為ととらえ、その探索行為の過程における経験の現れ方の差異から知覚と記憶を区別する。ベルクソンがこの行為論的な記憶論を正当化する議論を精査して、彼の記憶論を吟味する。

４．研究成果

(1) 本研究の主な成果は、想起の過程に関するベルクソンに独自の考えを明らかにしたことである。具体的には、ベルクソンにとっての想起には、記憶の時間的な広がりを制御するという心的な活動が伴うことを示した。また、このような想起に独自の心的な活動を示す際にベルクソンが連合主義を批判した議論を再構成した。これによって、記憶と知覚の識別過程に関するベルクソンの説明において、時間的な広がりを制御するという活動が重要な役割を果たしていることを示した。

(2) 本研究成果の意義は、ベルクソンの記憶論の中に、現代の記憶の哲学と比較可能な論点を見出したことである。「想起において何が制御されているのか（あるいはされていないのか）」という論点は記憶の特性を考える上で現代の記憶の哲学においても注目されている。また、このことは、現代の記憶の哲学が心理学や認知科学、神経科学との協働を見据えた研究を進めていること

を踏まえると、現代科学の観点から評価し直すことが可能な論点の一つをベルクソンの記憶論の中から見出したということも示唆している。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 平井靖史 ， 原健一 ， ドニ・ペラン	４．巻 53
２．論文標題 デジャヴュと記憶――ベルクソンと現代の記憶哲学	５．発行年 2022年
３．雑誌名 人文学論叢	６．最初と最後の頁 1075-1115
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

〔学会発表〕　計9件（うち招待講演　5件／うち国際学会　5件）

１．発表者名 原健一
２．発表標題 「技術的人工物が道徳的行為者性をもつ」とはどのような主張なのか？：フェルベーク『技術の道徳化』における技術的志向性について
３．学会等名 2024年度・後期 北海道哲学会 研究発表会
４．発表年 2024年

１．発表者名 Ken-ichi Hara
２．発表標題 Dual Object of Remembering: Bergson’s Analogy of Hypnotic Suggestion
３．学会等名 第54回ベルクソン哲学研究会
４．発表年 2024年

１．発表者名 Ken-ichi Hara
２．発表標題 Bergson’s Reinterpretation of the Memory-Perception Distinction
３．学会等名 Eurasian Memory Meeting（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2024年

１．発表者名
Ken-ichi Hara

２．発表標題
Bergson and Remembering as Action

３．学会等名
The first Hokkaido-Tartu philosophy workshop（招待講演）（国際学会）

４．発表年
2022年

１．発表者名
Ken-ichi Hara

２．発表標題
Bergson on Remembering as Action

３．学会等名
Remembering: Analytic and Bergsonian Perspectives 2（招待講演）（国際学会）

４．発表年
2022年

１．発表者名
Ken-ichi Hara

２．発表標題
Bergson’s Preservationism of Memory

３．学会等名
Atelier Bergson: Nouvelles perspectives sur Matiere et memoire（招待講演）（国際学会）

４．発表年
2023年

１．発表者名
原健一

２．発表標題
想起は能動的か、それとも受動的か――ベルクソンにおける想起の非創造性について

３．学会等名
ベルクソン哲学研究会

４．発表年
2022年

１．発表者名 原健一
２．発表標題 ベルクソンの記憶の哲学――知覚と想起はどのように区別されているのか
３．学会等名 第41回 新潟大学哲学思想セミナー NiiPhiS（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Ken-ichi Hara
２．発表標題 How We Can Distinguish Recollection from Perception：A Bergsonian View.
３．学会等名 Issues in Philosophy of Memory (IPM) 2.5（国際学会）
４．発表年 2021年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

―

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計1件

国際研究集会	開催年
Online Workshop: Deja-vu and memory. Bergson and Modern Philosophy of Memory	2021年～2021年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関